



# 学園通信

◆2021年(令和3年)10月20日発行 ◆Vol.51

故きを温ねて、新しきを知る 帯広葵学園のあしあと

(平成29年2月7日 十勝毎日新聞)

## 平成29年の試み…その2

### 学校法人帯広葵学園

理事長 上野敏郎

平成29年2月、児童発達支援教室「あおいとりプラス」開設記念と題して『異才少年画家 濱口瑛士絵画展』を市内ふじまるデパートで開催しました。『異才』の表現には多少の違和感を覚えますが、私はこの瑛士君と前の年の月に東京で会っています。なぜ、瑛士君と会ったかといえば、それは瑛士君の本『黒板に描けなかつた夢』(ブックマン社発行)を購入したことがきっかけでした。この本のタイトルを見て瞬間的に「学校の黒板は子ども達が夢を描くものなのに、なぜ、描けない？」と私は思ったのです。

しばらくしてからですが、私はその本を出版した編集者にその訳を聞くために上京します。その席に中学2年生の瑛士君がお母さんと一緒に同席してくれたのでした。そして、私は瑛士君と反だち?になり、瑛士君の絵画展を帯広で開くことを約束したのです。

平成29年は第1回になります。その後2回開いていますが、ここ2年間はコロナで中断しています。来年は、再開したいと考えています。

リビンで絵を描く濱口さん。画面にもう描き残さず、ひたすら絵に没頭する(東京都世田谷区内の自宅で)



## 十勝毎日新聞

一輪はいつから描くように? 3歳ころから、毎日描くようになった。昔から頭の中にあふれてくる物語を母親(園子さん)にずっと話すようになり、その内容を絵にするようになった。リビンの紙を置いておき、落書き感覚でつい夢中になる。作品として完成に至らない絵もあるが、「描きたくない」というスランプになったことはない。

発達障害を抱えながら独自の世界観で絵を描き続け「異才少年画家」として注目される、濱口瑛士さん(14)は東京都世田谷区在住の道内初の個展(学校法人帯広葵学園主催)が、9月14日、帯広市内の藤丸催しサロンで開催される。「文字が書けない人と言われたけど、絵を描く人と言われたようになりうれい」と、純粋に語る濱口さんの自宅を訪ね、絵や個展への思いを聞いた。(原山知寿子)

学ノート大くらの小さな作品が多いが、これからはもっと大きな絵を描いてみたい。

北海道は小学生になる前に一度行ったが、冬は初めて。十勝は牛乳・乳製品のイメージ。文字表記方法が定まっていなかったアイヌの文化は、書くことが苦手な自分にも通じるし、アイヌ文様はともきれいだと思う。個展では雪景色のアイヌの世界にいるファル(自身の作品に登場するオリジナルのキャラクター)を描いた作品も紹介する。アイヌの言葉を調べてタイトルも付けたのを見てほしい。

個展には新作5点を含む20点の作品を展示する。インスタレーションは短い時間の中で描くので大変だけど、楽しみにしている。2年前に「ROCKET」の一環で、フランスやパチカンなどを訪問し衝撃を受けた。以来、作品にメッセージを入れるようになったが、何かを感じて、それを自分に伝えてくれたらうれしいです。

打ち込む姿に「何か感じて」ROCKET事業担当者

濱口さんは読み書きが苦手な学校生活に悩まず、現在も中学2年生に在籍しながら不登校の状態が続いている。独自のキャラクターが織り成す独自の絵画が話題になり、特別な才能を持つ子どもを支援する、東京大学先端科学技術研究センターと日本財団の異才発掘プロジェクト「ROCKET」の第一期生に選ばれ、「報道ステーション」(テレビ朝日系)などで特集され反響を呼んだ。個展を企画した帯広葵学園の上野敏郎理事長は、濱口さんの著作「黒板に描けなかつた夢」を見て感銘を受け、上京時に出版社で濱口さんと園子さんと対面。教育や児童福祉への思いを語り、濱口さんからの協力の快諾を受けた。同法人が昨年音更町と帯広市内に児童発達支援施設「あおいとりプラス」を開設し、同時期に藤丸で開かれる心身障害児(者)作品即売会に合わせて、記念事業として、個展を企画した。

上野理事長は「文部科学省がまとめた全国の公立小・中学校の児童生徒の6.5%が発達障害とのデータもあり、生きづらさを感じている子どもたちが身近にいるということに気付いてほしい」と期待する。

ROCKET事業を担当する日本財団の沢渡一登ソーシャルインベション本部国内事業開発チームリーダーは「好きなことに打ち込み、才能を発揮する濱口君を通じて、何かを感じてほしい」と話している。

## 十勝毎日新聞

一輪はいつから描くように? 3歳ころから、毎日描くようになった。昔から頭の中にあふれてくる物語を母親(園子さん)にずっと話すようになり、その内容を絵にするようになった。リビンの紙を置いておき、落書き感覚でつい夢中になる。作品として完成に至らない絵もあるが、「描きたくない」というスランプになったことはない。

作展をみて自分の絵を披露するようになってから気持ちが変わった。見た人から感想や印象を聞くのは、自分が込めた思いと違っても、とてもうれしい。自己満足だったのが、自分の絵に責任を持つというか、色をもっと塗り込もうとか思うようになった。描くのは大

## 当時配布した絵画展チラシ



学校法人 帯広葵学園

〒080-0022  
帯広市西12条南17丁目3 雑波ビル2F  
TEL 0155-23-7604 / FAX 0155-67-5778  
URL <https://www.obihiraaoi.ed.jp/>

